

内への説明が足りない

昨日 23 日、通常国会が開会した。岸田首相は施政方針演説で「異次元の少子化対策」などを強調したという。今国会の最大の焦点は、戦後の安全保障と防衛政策、原発政策の大転換ではないか。国会での審議の前に、欧米諸国で防衛費増大を約束してきたが、その是非について徹底した審議が求められる。最初から論点そらしの施政方針演説では、国民の理解は得られない。

表題は毎日新聞 18 日夕刊、青木理「理の眼」。岸田首相のジョンズ・ホプキンズ大学高等国際問題研究大学院での講演録から一「昨年、私は安保政策で大きな決断を行いました」「国家安保戦略、国家防衛戦略及び防衛力整備計画、これら 3 文書の策定による、戦後の日本の安全保障政策の転換です」「日本や世界の行方に重大な影響をもたらす大変重い決断ではありましたが、私は正しい決断であったと信じています」

言うまでもなくこの「決断」が何を指すかといえ、従来は国内総生産(GDP)比 1%程度に抑えてきた防衛費の大幅増と敵基地攻撃能力の保有。続けて首相はこの歴史的意味をこう位置づけています。「吉田茂元総理による日米安保条約の締結、岸信介元総理による安保条約の改定、安倍晋三元総理による平和安全法制（引用注・集団的自衛権の一部行使を容認した安保関連法）の策定に続き、歴史上最も重要な決定の一つであると確信しています」

どうですかみなさん、私はこれほどの成果を引っさげてやってきたのですよーという首相の鼻息が聞こえてきそうですが、賛否はともかく、それが歴史的な政策転換だった事実に僕も異論はなし。

ただ……と思うのです。こんなせりふ、僕たちは聞かされたことがあつたらうかと。国会でも、選挙時も、各種記者会見でも、これほど重大な意味を持つのだと首相自身の口から聞かされ、真摯な説明を受けた記憶があるだろうか。

念のため、安保 3 文書改定直後の会見での首相発言をみても、「歴史上最も重要な決定」とか「日本や世界に重大な影響をもたらす大変重い決断」といった文言はなし。それほどの決定であり決断なら国会でもっと説明を尽くし、国会でも徹底して議論すべきなのに。

人はしばしば外面と内面が異なり、外面はいいけど実は…とか、外面は悪いけれど意外にこの人は…などと語られますが、今回の乖離は話が別。内では問題の核心をボカし、外には勇猛な決断だと自らの喧伝に勤しむ様から浮かぶのは、足元を欺いて盟主に実を献ぐゆがんだ為政者の姿。僕にはそう思われて仕方がないのですが、さて。

この国会は日本の行方、とりわけ戦争と平和の「分岐点」になるかもしれない。

(2023 年 1 月 24 日)